桜座一家　「静御前～うすずみ色の月～」

１　寡聞にしてこの「演フェス」で、乙女文楽が上演されたことを存じません。
　初めて目にされた方も多かろうと思います。その「面」の強さに肝を抜かれました。ただ「お顔」を観ているだけで、御前のお気持ち、遭遇なされている環境、心の内を観じさせる、お力がありました。「伝統ある文化の持つ底力」というものなのでしょうか。

２　ただ、これは、伝統文化の常識からは外れる事でありましょうが、足が宙に浮くのが「気になり」ます。その下５センチの所に「台」がありましたのに、なぜ、その胴串をほんの少し下げれば、台に足が着くのに、と口惜しく思って居ました。

３　その台が「３台」在って、その台に、一あし移るだけで、もうすっきり場面代わりが出来ます。不思議にも驚きました。これが「人形劇」というものの「舞台空間」だったのですね。

４　そして、この形式は「語り物」でした。「主語り」の他に七人の語り手が並びました。日本演劇の古典の型式になぞらえば、「長唄」、今風に言うなら「朗読劇」の手法と言えましょう。大胆な手法で難問を次々乗り越えて行かれる「桜座一家」の存在は、刺激的でした。

５　で、あるからこそ、最後の場面。
　乙女文楽、切っての立ち舞い。この場面の、主使いの大夫師匠の「お面」を消して、つまり、〈人間の存在を消す〉という意味で、「黒布」を被っては戴けないでしょうか。
　冒頭の節で申し上げました、あの「面」の強さをより強烈に印象づけるためには「人間の介在」を消した方が、「面」の「力」が湧き出して、至芸に至るのではないかと、恐れながら愚考致しました。失礼をお許しください。

追伸　「演劇集団　広小路」の上演をご覧下さって、「批評文」を書いて下さったのですね。こうした「交流」こそが本当の「切磋琢磨」の水準を創るのだと、感謝しています。ありがとうございました。

荒木昭夫（京都児童青少年演劇協会）